

第2回塩竈市総合教育会議 議事録

1 日 時 平成27年7月3日(金)
開会 15時00分 閉会 16時40分

2 会 場 壺番館3階共用会議室

3 出席者 塩竈市長 佐藤 昭
塩竈市教育委員会
委員長 柴田 仁市郎
委員長職務代行者 太田 忍
委員 山田 達磨
教育長 高橋 睦麿

(事務局)

市民総務部長	神谷 統
市民総務部政策課長	川村 淳
教育部長	菅原 靖彦
教育部教育総務課長	渡辺 常幸
教育部学校教育課長	高橋 義孝
教育部生涯学習課長	本田 幹枝
教育部市民交流センター館長	伊東 英二
教育部教育総務課係長	菊池 亮
教育部教育総務課専門主査	鈴木 和賀子

4 議 事 報告1 前回会議の報告について
議題1 塩竈市教育大綱について

5 概要

- 開会
- 佐藤市長あいさつ
- 柴田委員長あいさつ
- 議事

報告1 前回会議の報告について

- ・事務局から資料に基づき前回会議の報告を行った。

議題1 塩竈市教育大綱について

- ・大綱の意見交換を実施。次回会議では学校関係から意見を聴取することになった。

【主な質疑】

〈山田委員〉 不登校にはきっかけがある。そして、その積み重なったものが不登校につながると思う。資料のなかの「不登校になったきっかけ」についての設問で「無気力」が22.4%という結果が気になる。児童・生徒の慢性疲労症候群・ネット依存などが問題となっているが、

そういった医学的な見地から対応が必要なのではないか。

〈市長〉 不登校を事象としての見地から捉えるのではなく、医学的な見地からも捉え、最終的には、不登校の解消という出口まで導くための捉え方が必要である。

〈事務局（学校教育課長）〉 「無気力」ということをどうとらえるかが大事である。教育委員会としては、ゲーム依存・ネット依存の背景があるという想定の下に、予防する対策を行っている。専門家である医師の講話について情報化のモラルも含めた形で講演会を行う学校も増えている。

〈柴田委員長〉 経済状況等にも問題はあのではないか。母子家庭・父子家庭の割合が高いことなどから、家庭の経済状態が不安定なことは要因としてみてとれる。家庭環境や、問題を抱えた家庭にどういう問題が内在しているか分析する必要がある。

〈高橋教育長〉 分析方法には2つある。ひとつ目は、地域の特性を分析することである。小学校と中学校の不登校出現率の相関関係が塩竈では高く地域特性に影響があるのかもしれない。例えば、塩竈市の母子・父子家庭は、11.8%で県内1高い数字になっており、家族構成等が影響していることも想定される。ふたつ目は、各学校でも不登校を最重要課題としてとらえ、様々な取組を行っている。学校によっては、一度家庭訪問をするとその後に子どもの様子が荒れてしまうので、家庭訪問に来ないでほしい等と言われるところもある。そのような中で、繰り返し家庭訪問をして、親の理解が得られて、ひとつの山を越えられる学校の取組と、親から来ないでほしいといわれた時点で家庭訪問を諦めてしまう学校がある。一例ではあるが、各学校の取組の検証をしていく必要がある。

〈太田委員〉 家庭がとにかく一番重要である。ゲームをしすぎて親が歯止めをかけられず、夜遅くまで起きていて不登校になるという話を聞く。先日、玉川小学校で保護者対象の講演会を聞く機会があった。ゲームが子どもに与える影響についての講演であり、脳や目にも悪影響を与えるということで非常に勉強になった。このような取組は、親だけではなく子どもにもしてほしい。親が、寝るときには子どもからゲームを預かることをすべき。そうしないと、夜寝ている間にゲームを布団の中でしていたりする。親は、毅然とした態度で臨むべきである。親も、子どもにゲームをさせているとその間は子どもが静かで手がかからないから、子どもにゲームを預けて楽をしているという現状もある。親は、「夜はゲームをしない」等の約束を家族で話し合い、約束をきちんと家族で守っていくべきではないか。

〈柴田委員長〉 市として、スクールガードリーダーや部活動の外部指導員の取組、そして学校でも様々な取組を行い、緻密な手当てをしていると思う。次は、家庭に対しての取組を行っていくのがいいのではないかと思う。

〈市長〉 不登校については、平成20年に調査を行いその追跡調査もしている。しかしながら、依然として不登校数は減らず、改善されていない。ゲームやネット依存についても、子どもから取り上げるということは、現実問題として不可能であり、根が深い問題である。どういう形でそのあたりの問題に取り組むかを考えなければならない。東日本大震災の時には、実際、中学生が自ら進んでボランティア活動に取り組んでいた。みんなが、そのことに非常に驚いていた。そのような場になるとできるのだから、子どもたちのなかに力が潜在しているということである。私たちは地域全体として、そのような子どもたちの持つ潜在能力を引き出すことが必要である。

〈太田委員〉 芸術でも同様のことが言える。子どもたちの中には潜在能力があり、その能力を引き出すような環境を作ってあげることが重要である。本物の芸術に触れる機会や場を作っ

てあげることが大切であり、そのなかで子どもたちの中に眠っている能力が花開くのではないか。不登校についても、一番つらいのは本人である。不登校になっている子どもは、耳を傾けてほしいと思っている。先生方も親も一人ひとりに耳を傾けてほしいと思う。塩竈独自の手法も良いのだが、こだわらずに基本的な取組をすることも大切ではないか。

〈佐藤市長〉 柔道の教室では、上級者が下級生に親切に教えている。「長幼の序」である。

〈柴田委員長〉 そのような儒教の精神のような、人としての原点が希薄になってきている。

〈太田委員〉 子どもたちも千差万別であり、問題点にばかり目が行きがちであるが、原点に立ち返るべきではないか。具体的には、子どもの遊ぶ場所が限られてきているという問題がある。ふれあいエスプ塩竈のツリーハウスには不審者がいる、公民館では、年配の方々が多く子どもが遊ぶところがない、学校の校庭では駐車している車があるためにボール遊びが禁止されている等、大人の都合で子どもたちが遊ぶ場所が限定されているという問題がある。のびのびと遊ぶ場所を提供する必要があると思う。

〈柴田委員長〉 かぎっ子が問題となった時期があった。その頃に塩竈市体育館ができて、子どもたちの遊び場をつくるということで、柔道で遊ばせようという趣旨で柔道教室を始めた経過がある。今も遊び場が少ないと思う。また、親が関わって一緒に遊ぶことも必要である。

〈山田委員〉 今問題になっているのは、心の問題であり、居場所の確保が必要である。自分が認められていて、社会や家庭の中で何かを任されている、役割があるという実感が必要ではないか。

〈市長〉 学校生活においては、成績というのは二次的なことで、学校に9年間楽しく行ってくれるのが究極の思いである。

〈高橋教育長〉 今は、子どもたちの心の耐性が落ちている。トラブルになった時の、逃げ方を知らない。教育委員会では、トラブルになった時の居場所を用意しているが、なかなかはまらないということもある。また、学校では総合的な学習でも様々な行事活動・手立てを講じている。ただ、学習指導要領が変わり学力重視にシフトしているため、特別活動の時間が減っている現状がある。

〈柴田委員長〉 浦戸の小中一貫校に期待している。同じ建物に小学生と中学生がいるのは、とても意味がある。学年の年齢が離れすぎているといじめは起こりにくい。年長の児童・生徒が年下の子どもをかばっていじめの起こりにくい環境が出来上がっているのではないか。

〈山田委員〉 子どもを集めて夏休みに1泊2日の座禅会を行っている。体を動かすゲームを行い、班別の対抗戦形式にすると子どもたちは楽しんでいる。

〈柴田委員長〉 山田委員のような方が学校に行って生きることの大切さを話すような機会を作ることはとてもよい取組だと考える。

〈佐藤市長〉 太田先生の指導しているコーラスグループの活動を子どもたちに見せることも良い取組ではないか。80歳を過ぎても、元気に活躍している方々も多くいらっしゃる。80歳を過ぎても主役になれるという、まさに生涯学習である。ライフサイクルを通じて塩竈で一生を生きていくという気持ちを持ってほしい。

〈太田委員〉 いくつになっても自分を認めてほしいという気持ちはある。

〈山田委員〉 塩竈は、コンパクトで狭い町なので人材発掘に力を入れると、優れた人材が見つかりやすいのではないか。埋もれた人材がたくさんいると思う。あとは、活躍できる機会をどうやって作り出すかということが課題であると思う。

〈柴田委員長〉 education は、本来の意味が「ひきだす」ということですから、そのような方々

の才能を引き出していけたらと思う。

〈太田委員〉 子どもから年配の方々まででサークルをつくって、最終的には「楽しい」「よかった」と思えるものがあるといい。子どもたちの心を生き生きさせたい。

〈高橋教育長〉 学校でも、多くの取組を行っている。取組の当初は、作った時のエネルギー・想いがある。10年取組を継続していると、形は同じだがエネルギーがどうしても落ちる。学校の先生方をかばうようになってしまうが、教員も忙しすぎる。どうしても、前年踏襲になってしまう。あれも、これもとなつて多忙化してしまう。

〈柴田委員長〉 もっと教育にお金をかけるべきである。教師の加配は、必要かと思う。教師は、日々の仕事に忙殺されるので、子どもとの時間をとれる時間を割いてほしい。

〈高橋教育長〉 現状では不登校に対応できる人材が不足している。県教育委員会で予算については確保していただけることになっているが、人材が見つからない。せつかく、不登校の児童生徒が学校に登校してきたときに、対応できる職員が不足している。

〈佐藤市長〉 放課後児童クラブでも、今年4月から6年生まで受け入れを拡大した。指導員と補助員という体制で行っているが、拡充した分の職員が充足できないという現状である。そして、6年生まで受け入れを拡大したことにより、今まで勤務していた職員も辞めていくという問題もある。放課後児童クラブは、学校の子どもたちを預かるのだが、健康福祉部の所管であり、文部科学省と厚生労働省のギャップ・壁がある。同じ子どもたちの放課後を預かるので、学校でも放課後児童クラブと連携しているのだが、省庁の壁は大きい。